

第63回名古屋春栄会
演目のあらかし

令和4年2月6日

名古屋春栄会事務局

目 次

翁（おきな）	1
鶴亀（つるかめ）	2
小督（こごう）	3
羽衣（はごろも）	4
経政（つねまさ）	5
芦刈（あしかり）	6
天鼓（てんこ）	7
三輪（みわ）	8
春栄（しゅんねい）	9
誓願寺（せいがんじ）	10
三輪（みわ）	11
盛久（もりひさ）	12
老松（おいまつ）	13
〔能のミ二知識	14〕

このリーフレットは、第63回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
演目の記載順は、番組の順です。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

翁（おきな）

【作者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穰を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」という2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸ひ心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおわしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

＜翁舞＞

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

鶴亀（つるかめ）

【分類】初番目物（協能＝唐物） *楽

【作者】不詳

【主人公】シテ：皇帝（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国では年の始めに、華麗な宮殿で、四季の節会の最初の儀式が行われました。まず、官人が出て、御代を讃え、皇帝が月宮殿に行幸なる由を触れます。皇帝は大臣たちを従えて登場し、宮殿に着座して、群臣から拝賀を受けます。ついで大臣は毎年の嘉例により、鶴亀を舞わせることを奏聞します。池の水ぎわに遊ぶ鶴と亀は、皇帝の長寿を讃えてめでたく舞い納めると、皇帝も喜び、国土の繁栄を祝って、自ら舞を舞い、やがて長生殿へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

月宮殿の白衣の袂。月宮殿の白衣の袂の。いろいろ妙なる。花の袖。秋は時雨の紅葉の葉袖。冬は冴えゆく雪の袂を。ひるがえす衣も薄紫の。雲の上人の舞楽のかずかず。げいしょう羽衣の曲をなせば。山河草木国土豊に千代万代と。祝い奉り。官人駕輿丁御輿を早め。君の齡も長生殿に。君の齡も長生殿に。還御なるこそ。めでたけれ。

小督（こごう）

【分類】 四番組物（現在物＝侍物） ＊男舞

【作者】 金春禅竹

【主人公】 シテ：源仲国（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

小督の局は、高倉帝の深い寵愛を受けていましたが、平清盛の娘徳子が帝の中宮となったので、清盛の権勢をはばかり宮中を去り、姿を隠してしまいます。高倉院はそのことを日夜嘆いておられました。小督が嵯峨野のあたりにいるという噂をお聞きになり、早速捜し出すように勅命を弾正大弼源仲国のもとへおつかわしになります。折から八月十五夜、小督はきっと琴を引かれるでしょうから、その音を使りに捜すことにしようとお答えすると、院は寮の御馬を下さったので、仲国はそれに乗って急いで出かけます。

<中入>

嵯峨野の小督の隠れ家では、悲しい思いを琴の音でまぎらわそうと、局は侍女たちと語り合っています。仲国は名月の嵯峨野を馬で馳せめぐりますが、ただ片折戸をしたところというだけが目当てなので、捜しあぐねています。やがて法輪寺のあたりで、かすかに琴の音が聞こえてくるので、耳をすますと「想夫恋」の曲です。その音をたよりに、局の隠れ家を尋ねあてますが、小督は戸を閉じて中へ入れようとしません。侍女のとりなしで対面した仲国は、院の御文を渡し、御返事を請います。小督は院の思召しに感泣します。そして仲国はなごりを惜しむ酒宴に舞を舞い、小督に見送られて都に帰ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

木枯に。吹き合わすめる。笛の音を引き留むべき言の葉もなし。言の葉もなし。言の葉もなし。言の葉もなき君の御心。われらが身までも物思いに。立ち舞うべくもあらぬ心。今は帰りて嬉しさを。何に包まん唐衣豊に。袖打ち合わせ御暇申し。急ぐ心も勇める駒に。ゆらりとうち乗り。帰る姿の跡はるばると。小督は見送り仲国は。都へところ。帰りけれ。

羽衣（はごろも）

【分 類】 三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作 者】 不詳

【主人公】 シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分...下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようとして持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと思返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

あずま遊びのかずかずに。あずま遊びのかずかずに。その名も月の。色人は。三五夜中の空にまた。満願真如の影となり。御願円満国土成就。七宝充満の宝をふらし。国土にこれを施したもう。さるほどに。時移って。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原浮き島が雲の。足高山や富士の高根。かすかになりて天つみ空の。霞にまぎれて失せにけり。

経政（つねまさ）

【分類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作者】不詳

【主人公】シテ：平経政の霊（面・童子）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

京都の仁和寺、御室御所〔おむろごしょ〕の守覚〔しゅがく〕法親王は、琵琶の名手である平経政を少年の頃から寵愛されていました。ところが、このたびの一ノ谷での源平の合戦において、経政が討ち死にしたので、生前、彼にお預けになったこともあった「青山〔せいざん〕」という銘のある琵琶の名器を仏前に供え、管絃講〔かげんこう〕を催して回向するように行慶〔ぎょうけい〕僧都に仰せつけになります。行慶は、管絃を奏する人々を集めて法事を行います。すると、その夜更けになって、経政の亡霊が幻のように現れ、御弔いのありがたさに、ここまで参ったのであると僧都に声をかけます。そして、手向けられた琵琶を懐かしく弾き、夜遊の舞を舞って興じます。しかし、それもつかの間、やがて修羅道の苦しみに襲われ、憤怒の思いに戦う自分の姿を恥じ、灯火を吹き消して闇の中に消え失せます。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

いや雨にてはなかりけり。あれ御覧ぜよ。雲の端の月に並の岡の松の。葉風は吹き落ちて。村雨のごとくに音ずれたり。面白やおりからなりけり。大絃はそうそうとして。村雨のごとしきて。小絃はせっせっとして。ささめ言に異ならず。第一第二の絃は。さくさくとして秋の風。松を払って疎韻に落つ。第三第四の絃は。れいれいとして夜の鶴の。子を思つて籠の内に鳴く。鶏も心して。夜遊の別れとどめよ。一声の鳳管は。秋秦嶺の雲を動かせば。鳳凰もこれにめでて。桐竹に飛びくんだりて。翼を連らねて舞い遊べば。律呂の声声に。心声に発す。声文をなす事も。昔を返す舞の袖。衣笠山も近かりき。面白の夜遊や。あら面白の。夜遊や。

芦刈（あしかり）

【分類】 四番目物（男物狂物） *男舞
【作者】 世阿弥（古能を改作）
【主人公】 シテ：日下左衛門（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（今回の仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

津の国の日下の里（大阪府東大阪市）の住人の左衛門は貧乏のすえ、心ならずも妻を離縁します。妻は、京の都に上って、さる高貴な人の若君の乳母となり、生活も安定したので、従者を伴って難波の浦へ下り、夫の行方を尋ねます。在所の者に聞いても、以前のところにはいないということで、途方にくれますが、しばらくの間、付近に逗留して夫を捜すことにします。一方、左衛門は落ちぶれて、芦を刈りそれを売り歩く男になっています。しかし、彼はその身の不遇を嘆くでも怨むでもなく、すべてを運命と割り切って、時に興じ物に戯れ、自分の生業に満足しています。そして、ある日妻の一行とも知らず、面白く嘯しながら芦を売り、問われるままに、昔、仁徳天皇の皇居があった御津の浜の由来を語り、笠尽しの舞をまっせ見せます。いよいよ買ってもらった芦を渡す段になって、思いがけず妻の姿を見つけ、さすがに今の身の上を恥じて、近くの小屋に身を隠します。後を追おうとする従者をとどめ、妻は自分で夫に近づき、やさしく呼びかけます。夫婦は和歌を詠み交わして、心もうちとけ、再びめでたく結ばれます。装束も改めた左衛門は従者のすすめで、和歌の徳を讃え、祝儀の舞をまい、夫婦うち揃って京の都へ帰ってゆきます。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

難波津に。咲くやこの花冬ごもり。今は春べと咲くや。この花と栄えたまいける。仁徳天皇と。聞こえさせたまいは。難波の皇子のおんことまた浅香山の言の葉は。采女の。杯取りあえぬ。恨みを述べし故とかや。この二歌は今までの。歌の父母なる故に。代々にあまねき花色の。言の葉草の種とりて。われらごときの。手習う始めなるべし。しかれば目に見えぬ。鬼神をもやわらげ。武士の心慰むる。夫婦の情知ることも今身の上知られたり。津の国の。難波の春は夢なれや。芦の枯葉に風わたる。波の立ち居の隙とても。浅かるべしやわだずみの。浜の真砂は。よみ尽くし尽くすとも。この道は尽きせめや。ただもてあそべ名にし負う。難波の恨みうち忘れて。ありし契りに帰り逢う。縁こそ嬉し。かりけれ。

天鼓（てんこ）

【分類】 四番目物（遊樂物・唐物） *楽

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：天鼓の父・王伯（面・小尉）、 後シテ：天鼓の霊（面・童子）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国に王伯王母という夫婦がいました。妻は天から鼓が降り下り、胎内に宿る夢を見て一子を生み、その名を天鼓とつけました。その後本物の鼓が天から下り、その子供の手に入ります。それは実に美しい音を出します。その噂を伝え聞いた天子が、鼓を献上するように命じます。少年はそれを拒んで山中に逃げたが、探し出され、鼓は召し上げられ、その身は呂水に沈められてしまいます。宮中に運び込まれたその鼓は、その後、誰が打っても音を出しません。[ここまでは能では演じられません]

そこで、勅使が少年の老父のもとにつかわされ、宮中へ来て鼓を打つように命ぜられます。愛児を失った老父は、日夜悲嘆に泣いていますが、勅命を受け、自分も罰せられる覚悟で参内します。恐れかつ懐かしむ心で鼓を打つと、不思議にも妙音を発しました。この奇跡に、天子も哀れを感じ、老父に数多の宝を与えて帰させます。

<中入>

そして天鼓のために、呂水の堤で、追善の管絃講（音楽法要）を行います。すると天鼓の霊が現われ、今は恨みも忘れて手向けの舞樂を謝し、自ら供えられた鼓を打ち、樂を奏し、喜びの舞を舞って興じます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

おもしろや時もげに。おもしろや時もげに。秋風楽なれや松の風。柳葉を。払って月も涼しく。星も相逢う空なれや。烏鶺の橋のもとに。紅葉を敷き。二星の館の前に風冷やかに夜もふけて。夜半楽にも早なりぬ。人間の水は南。星は北にたんだくの。天の海面雲の波。立ちそうや呂水の堤の。月にうそむき水にたわむれ。波をうがち。袖を返すや。夜遊の舞樂も時去りて。五更の一点鐘も鳴り。鳥は八声のほのぼのと。夜も明け白む時の鼓。数は六つの巷の声に。また打ち寄りて現か夢か。またうち寄りて現か夢。幻とこそなりにけれ。

三輪（みわ）

【分類】 四番目物（夜神楽物＝略初番目物） ＊神楽

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：里女（面・曲見）、 後シテ：三輪明神（面・増女）

【あらすじ】（今回の連吟の部分…下線部）

大和国（奈良県）三輪山の麓に庵室をかまえている玄賓僧都のもとへ、毎日密〔しきみ〕と閻伽〔あか〕の水を持ってくる女があります。今日も、この淋しい庵を訪れた女は、罪を助けてほしいと、僧都にたのみます。そして、秋も夜寒になって来たので、衣を一枚いただきたいといひます。僧は衣を与え、女の住家を尋ねると、「わが庵は三輪の山もと恋しくば、とぶらひ来ませ杉立てる門」という歌があるが、その杉立てる門を目じるしにおいでなさい、といひすてて、姿を消します。

<中入>

里の男は宿願のため三輪明神に日参していますが、今日が満願の日に当り参詣すると、御神木の杉の枝に一枚の衣が掛かっています。見ると玄賓僧都の衣なので、不審に思い、早速僧都に知らせにやってきました。僧都が、この者に勧められて神前に来て見ると、いわれた通り、自分の衣が掛かっており、その裾に一首の歌が書いてあります。それを読んでいると、杉の木陰から御声がして、女姿の三輪明神が現われ、神も衆生も救うためしばらく迷い深い人間の心を持つことがあるので、罪を助けてほしいといひ、三輪の妻問いの神話を語り、天照大神の岩戸隠れの神話を物語って神楽を奏しますが、夜明けと共に消えてゆきます。

【詞章】（今回の連吟の部分の抜粋）

天の岩戸を引き立てて。神は跡なく入りたまえば。常闇の夜と。早なりぬ。八百万の神たち。岩戸の前にてこれを歎き。神楽を奏して。舞いたまえば。天照太神その時に岩戸を。少し開きたまえば。また常闇の雲晴れて。日月光かかやけば。人の面。白白と見ゆる。おもしろやと神のみ声の。妙なる始めの。ものがたり。思えば伊勢と三輪の神。思えば伊勢と三輪の神。一体分身のおん事。今さらなにと岩倉や。その関の戸の夜も明け。かくありがたき夢の告げ。覚むるや名残。なるらん。覚むるや名残。なるらん。

春栄（しゅんねい）

【分類】二・四番目物（侍物） *男舞

【作者】世阿弥

【主人公】シテ：増尾種直（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

増尾の春栄丸は宇治の合戦の際に捕われの身となって、伊豆国・三島の高橋権頭家次の陣屋につながれています。家次は春栄丸が自分の死んだ息子に似ているので養子にしたいと考えますが、既に斬罪の判決が下っていて今は刑の執行を待つばかりです。そうしたある日、春栄丸の兄・増尾太郎種直が家次の館を訪ね、春栄丸に面会を申し入れます。春栄丸は兄の来訪を喜びますが、肉親と知れては同罪になると恐れて、家来の者だと言い張ります。兄は弟と一緒に殺される覚悟で来たので、それでは情けないと言って腹を切ろうとします。ここに至って春栄丸も翻心し互いに名乗りあいます。委細を見ていた権頭は兄弟愛に涙を催します。そして種直に自分が春栄丸を貰うけたい由を話していると、鎌倉から囚人の断罪を命じられ、最期と覚悟をしていると、再び鎌倉より赦免が伝えられ、一同は喜び、種直は舞を舞い、春栄丸は家次の養子となって共に鎌倉に旅立ちます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

あずま路の。秩父の山の。松の葉の。千代の影そう。若みどりかな。若みどりかな。
若みどりかな。老木も若みどり。立つや若竹の。親子の契り。または兄弟。かれと
いいこれといい。いずれもいずれも睦ましく。親子兄弟と。栄うることも。これ孝
行を。守りたもう。三島の宮の。ご利生と伏し拝み。親子兄弟。さも睦ましく。う
ち連れて。鎌倉へこそ。参りけれ。

誓願寺（せいがんじ）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：里女（面・増女）、後シテ：和泉式部の霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

一遍上人が熊野権現に参籠している時に、「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」の札を広めよという霊夢を見ます。そこで、上人は都に上り、念仏の大道場、誓願寺で御札を配ばります。すると、一人の女性が御札の言葉を見て、「六十万人より外は往生できないのでしょうか」と問いかけます。上人は、「これは霊夢の、六字名号一遍法、十界依正一遍体、万行離念一遍証、人中上々妙好華の四句の上の字をとったものであり、南無阿弥陀仏とさえ唱えれば誰もが必ず往生できる」と説きます。すると女性はありがたがり、「本堂の『誓願寺』の寺額に替えて、上人の手で『南無阿弥陀仏』の六字の名号をお書きください。これはご本尊阿弥陀如来の御告です。私はあの石塔に住む者です」と言って、近くの和泉式部のお墓に姿を消します。

<中入>

一遍上人が『南無阿弥陀仏』の名号を書いて本堂に掲げたところ、どこからともなく良い香りがし、花が降り、快い音楽が聞こえ、瑞雲に立たれた阿弥陀如来と二十五菩薩と共に、歌舞の菩薩となった和泉式部が現れます。そして、誓願寺が天智天皇の勅願によって創建された縁起を語ります。続いて、阿弥陀如来が西方浄土より誓願寺に來迎される模様などを表す莊嚴優美な舞を舞います。最後に、菩薩聖衆みな一同に本堂の六字の額に合掌礼拝します。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

ひとりなお。仏の御名を。尋ね見ん。おのおの帰る法の場人。法のにわびと法の場人の。声も妙なり称名の数数。虚空にひびくは。音楽の声。異香薫じて。花ふる雪の。袖をかえすや。返す返すも。貴き上人の利益かなと。菩薩聖衆は面面に。御堂に打てる。六字の額を。皆一同に。礼し給うは。あらたなりける。奇瑞かな。

三輪（みわ）

【分類】四番目物（夜神楽物＝略初番目物） ＊神楽

【作者】不詳

【主人公】前シテ：里女（面・曲見）、 後シテ：三輪明神（面・増女）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

大和国（奈良県）三輪山の麓に庵室をかまえている玄賓僧都のもとへ、毎日櫛〔しきみ〕と閻伽〔あか〕の水を持ってくる女があります。今日も、この淋しい庵を訪れた女は、罪を助けてほしいと、僧都にたのみます。そして、秋も夜寒になって来たので、衣を一枚いただきたいといひます。僧は衣を与え、女の住家を尋ねると、「わが庵は三輪の山もと恋しくば、とぶらひ来ませ杉立てる門」という歌があるが、その杉立てる門を目じるしにおいでなさい、といひすてて、姿を消します。

<中入>

里の男は宿願のため三輪明神に日参していますが、今日が満願の日に当り参詣すると、御神木の杉の枝に一枚の衣が掛かっています。見ると玄賓僧都の衣なので、不審に思い、早速僧都に知らせにやってきました。僧都が、この者に勧められて神前に来て見ると、いわれた通り、自分の衣が掛かっており、その裾に一首の歌が書いてあります。それを読んでいると、杉の木陰から御声がして、女姿の三輪明神が現われ、神も衆生も救うためしばらく迷い深い人間の心を持つことがあるので、罪を助けてほしいといひ、三輪の妻問いの神話を語り、天照大神の岩戸隠れの神話を物語って神楽を奏しますが、夜明けと共に消えてゆきます。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

されどもこの人。夜は来れども昼見えず。ある夜の睦言に。御身いかなる故により。かく年月を送る身の。昼をば何と鳥羽玉の。夜ならで通い給わぬは。いと不審多き事なり。ただ同じくはとこしなえに。契りをこむべしとありしかば。彼の人答えいふよう。げにも姿は恥ずかしの。漏りてよそにや知られなん。今より後は通うまじ。契りも今宵ばかりなりと。懇に語れば。さすが別れの悲しさに。帰る所を知らんとて。苧環に針をつけ。裳裾にこれを綴じつけて。跡をひかえて慕い行く。まだ青柳の糸長く。結ぶや早玉の。おのが力にささがにの。糸くり返し行く程に。この山本の神垣や。杉の下枝に止りたり。こはそもあさましや。契りし人の姿か。その糸の三わけ残りしより。三輪のしるしの過ぎし世を。語るにつけて恥かしや。

盛久（もりひさ）

【分類】四番目物（雑能＝現在物） *男舞

【作者】観世十郎元雅

【主人公】シテ：主馬判官盛久（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（仕舞の部分...下線部）

平家の侍、主馬判官盛久は、捕われの身を、鎌倉へ護送されることとなります。その出発に際して、盛久は警固の武士、土屋某に頼んで、日頃信仰する東山の清水観音に輿をまわしてもらい、最後の祈願をします。やがて花の都に名残を惜しみつつ、東海道を鎌倉へと下ります。鎌倉に着き、旅宿に幽閉された盛久は、流転の身を振り返り、早く斬られたいと述懐します。そこへ土屋が訪れ、処刑の時が迫った由を告げたので、盛久は心静かに法華経を読誦します。夜明け方、ふと仮寝をした盛久は、夢の中で観音のお告げを受けます。かくて夜が明け、盛久は土屋に伴われて、刑場である由比ヶ浜に急ぎます。太刀取りが、彼の後ろから斬りつけようとする、盛久の手にした経巻から発する光で目が眩み、思わず取り落とした太刀は、二つに折れてしまいます。この知らせを受けた頼朝は、盛久を呼び寄せます。盛久は衣服を改めて、御前に参上し、尋ねに応じて、彼が見た、清水あたりから来た老夫婦が盛久の日頃の信心を嘉して、「われ汝が命に代るべし」と仰せられたという霊夢を物語ります。頼朝は、自分の見た夢と全く一致するので奇特に思い、盛久の命を助け、盃を与えます。そして盛久は所望にまかせて、御代を壽ぎ、我が身の喜びを添えて舞をまい、御前を退出します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

酒宴なかばの春の興。酒宴なかばの春の興。くもらぬ日影のどかにて。君を祝う千秋の鶴が岡の。松の葉の塵。失せずして正木の葛。長居は恐れあり。長居は恐れありと。まかり申しつかまつり。退出しける盛久が。心の内ぞゆゆしき。心の内ぞゆゆしき。

老松（おいまつ）

【分 類】初番目物（脇能＝老神物） *真ノ序ノ舞

【主人公】前シテ：老人（面・小尉）、後シテ：老松の神（面・石王尉）

【作 者】世阿弥

【あらすじ】（仕舞の部分...下線部）

都の西の方に住む梅津の某は、北野天満宮の夢のお告げを蒙り、筑紫国（福岡県）の安楽寺へ参詣することになります。はるばると旅をして、菅原道真の菩提寺である安楽寺へ着くと、老人と若い男がやって来て、梅と桜のことを述べ、花盛りの梅に垣を作ります。梅津の某は、彼等に言葉をかけ、有名な飛梅はどれかと問うと、神木であるから紅梅殿と崇めなさいとたしなめられ、同じく神木である老松についても教えられます。さらに梅津の某の頼みで、社殿の周辺の景色を述べ、松や梅が天神の末社として栄えていることを示し、中国では、梅は文学を好むので「好文木」といわれ、松は秦の始皇帝の雨やどりを助けたので「大夫」の位を授けられた故事などを教えたあと、神隠れします。

<中入>

おどろいた梅津の某は、供の者に土地の人を呼びにやらせ、その人から詳しく道真の事蹟や道真を慕って飛んできた梅、後を追ってきた松の話を聞きます。里人の勧めで梅津の某の一行は、松陰で旅寝をして神のお告げを待ちます。すると、老松の神霊が、紅梅殿に呼びかけながら登場し、のどかな春を祝って舞をまい、君の長寿を祝い、御代の永遠をことほぎます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

さす枝の。さす枝の。梢は若木の花の袖。これは老木の神松の。これは老木の神松の。千代に八千代に。さざれ石の。巖となりて。苔のむすまで。苔のむすまで。松竹。鶴亀の。齡をさずくるこの君の。ゆくすえ守れと我が神託の。告を知らする。松風も梅も。久しき春こそ。めでたけれ。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓:台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常 5 分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して 10~20 分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち一種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精
仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人
や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテ
ンポで勇壮闊達に舞います。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至
るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありませ
ん。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。

雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な
所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活
発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>